

重く薄れゆく 悲惨な戦争の真実を

世代を越えて語り継ぐ

落語家・桂竹丸インタビュー

今から73年前、鹿児島県知覧にあった特攻基地から多くの若者たちが飛び立ち、帰らぬ人となりました。そんな過酷な運命を背負わされた少年兵たちを題材にした『ボタルの母』という創作落語を、2005年から13年演じている落語家の桂竹丸さんにお話を伺いました。

「ボタルの母」を演じ始めたきっかけはなんですか。

竹丸さん 事務所の社長に、「竹ちゃん鹿児島だから、これ読んでみたら」と手渡された本がありまして。それが、『ボタルの母』（草思社）で、大戦末期に軍の指定食堂を営み、「特攻の母」と慕われた鳥浜トメさんと若い特攻隊員との交流が描かれていました。――著者はトメさんの次女である赤羽礼子さんですね。竹丸さん はい。それを読ん

で、もしかしたらこれで落語ができるのではないかと。

落語って、先代の林家三平師匠みたくにとにかく面白い話をバンバンやる滑稽漸（こっけいばなし）もあれば、人情漸もある。歌丸師匠がやってた「真景累ヶ淵」（しんけいかさねがふち）のような怖い怪談漸もあったりして、非常に幅が広いわけですよ。特攻の話なんで重いんだけど、落語に人情漸があるんだから、これは落語ができる

んではないだろうかと思ったのがきつかけなんです。

立川談志師匠は、俺は落語家だと。柳家小三治師匠は、私は噺家であるとおっしゃっていました。私もやはり噺家という言葉の方が良いのではないかと思います。

――とはいえ落語としては重た過ぎるテーマですね。

竹丸さん 自分の故郷が鹿児島であったということも大きいでしょうね。ぼくは鹿児島鹿屋（かのや）の出身なんです。陸軍は知覧、海軍は鹿屋とそれぞれが特攻基地を置き、多くの若者が南海に向けて飛び立っていった。この鹿児島で生まれ、落語家になって、一つの点となって結びつ

本当にありがたい 普通に生きる素晴らしさ

攻つていうのはどうなのかなあって空気を感ずることもあります。

――特攻基地があった鹿屋で生まれ育ち、時代が違っていたらという思いはありますか。竹丸さん 戦後73年、戦争についてのは一応ないじゃないですか。戦争の被害を我々が被っていないという。兵役だつてないし、本当にこれはありがたいことですね。生まれてきて、自分がしたいことをし



国立演芸場にて落語を演じる桂竹丸（かつらたけまる）さん。1957年生まれの61歳で、出身は鹿児島県鹿屋市。4代目桂米丸に師事し、先月お亡くなりになられた桂歌丸さんは兄弟子にあたる。歴史上の人物などを題材とした新作落語を得意とする。
☆講演の依頼等は(有)トムプロダクション（☎03-3418-1664）までご連絡を

極悪非道なる戦争 痛み知らぬアベ許すな

【多摩・稲城・塗装・諸星武司】私の家族と73年前の太平洋戦争との関わり、ほんの一端を記します。戦中、父は兵役を免除され、国営鉄道・大井工機部員車職場に勤務し、姉2人は勤めと学校の関係で、父母の出身地の秦野に疎開せず、大田区蒲田に住んでいました。東京大空襲の時、多摩川の六郷土手に避難し、小学生の私たちに「あなたたちがいたら絶対助からなかった」と何

原つて世界があります。古典落語には、花魁（おいらん）とかがいる吉原の話がたくさん出てきます。けどみんな知らないし。だから、その形が消えたとしてもメッセージを伝えることはまだまだ可能なんじゃないか。

60年安保闘争の岸首相の振る舞い。そしてその孫の安倍首相の憲法破壊の悪政。アベ政治は許さない」と更に声を強めましょう。



諸星さん

した体制になっています。さまざまな人々が関わりバラはつながってきました」と鳥生さんは話します。

毎年、5、10月には特別公開もしています。「このバラは昔から満開になるまでに花の色が変わるのが特徴。秋の花は小ぶりで、すっきりしたイメージです。高校の卒業生や地域のケア施設の高齢者の皆さんも楽しみにしてくれています。人の善意で40年もつなぐバラが、今度は人のつながりを広げています」と鳥生さん。

アンネのバラとは

13、16日の4日間です。ぜひ、読者の皆さんも訪れてみてください。



色の変化が特徴のアンネのバラ

善意がつかないだ40年

「アンネのバラ」が広げる輪

杉並区高井戸東にある区立高井戸中学校。ここには、1976年から約40年間、生徒、教職員、保護者、地域の人のたゆまぬ努力によってアンネのバラが生き続けています。7月20日の午後、自身も高井戸中卒業生であり、アンネのバラの生育に長くかかわってきた鳥生千恵さんの案内で現場を訪問しました。

高井戸中学校（以下、高中）の正門を入ると高井戸図書館がある右側、校舎のある左側にバラの植えられた庭園が伸びています。

の協力組織『アンネのバラサポーターズ』で水やり、除草花から摘みなどの世話をしています。当初は3株でした。そこから挿し木や芽接ぎをして増やしていき、杉並区内の学校や図書館に分けています」と鳥生さんの案内で高中に入りましたが、バラの開花期ではなく、花壇には葉の緑が目立っていました。



鳥生千恵さん

「高中に1976年に贈られてきてしばらくは盛り上がりでしたが、学校なので生徒は卒業、先生は転勤があります。1990年代後半には、その由来もよくわからない存在になっていました。そんな中で

も2人の学校主事さんが世話を続けてきたのです。その後、高中に赴任してきた熱心な先生の指導で生徒自身がバラ委員会を立ち上げ、それをサポートするために私たちが地域住民の組織を作り、今は安定

今年、秋の特別公開は10月

の申し出で受け、オットーさんから贈られました。